ひと口ぶんにはひと口ぶん　　アラビア

昔むかし、貧しい母親が、ひとり息子の帰りを待っていました。息子は、長いこと母親のもとを離れて、遠いよその国で暮らしていました。母親は、待ちくたびれて、いつか息子が帰って来るとは、もう考えようともしなくなっていました。

ある日、母親が食事をしていると、ひとりの物乞いが戸口に立って、食べ物をめぐんでくれないかとたのみました。母親は、ちょうど、パンをひと口ぶんちぎって、口に運んだところでした。そこで、そのひと口ぶんを食べるのをやめて、それを丸ごとのパンに添えて、物乞いにさし出しました。それで、母親はまる一日、何も食べないでお腹を空かせていました。

何日かして、いきなり息子が帰って来ました。息子は、母親にさまざまな話をして、いいました。

「でも、一番恐ろしかったのはね。何日か前、大きなやぶの中を旅していると、ふいに一頭のライオンがおそいかかって来たんだ。ライオンはぼくをやぶの中に引きずりこんでひき裂こうとした。そのとき、とつぜん、大きな男が現れて、素手でライオンの首をつかまえて、高々と持ち上げたんだ。そして、『立ち去れ。ひと口ぶんにはひと口だ』といって、投げ落としたんだ。ライオンは大急ぎで逃げて行った。気を取り直してから、探したんだけど、男はもういなくなっていたんだ。ぼくは、けがひとつしなかった」

息子がライオンから救われたのは、母親がパンひと口ぶんを食べないで、丸ごと物乞いにさし出したのと、ちょうど同じ時刻だったのです。

原話：『世界の民話８中近東』鈴木満訳／ぎょうせい
再話：村上郁